

# 不死と退屈

## —ウィリアムズの議論から—

鶴田尚美

### 要旨

通常わたしたちは、死は人生において最大の悪だと考えており、短い生よりも長い生の方がよりよいと思っている。それでは、不老不死であったとしたなら、わたしたちの人生はよりよいものになるのだろうか。バーナード・ウィリアムズは、不死は本人にとって望ましいものではなく、不死の人間は必然的に人生に退屈すると論じている。本稿は、ウィリアムズの主張の根底にある人格概念をデレク・パーフィットの還元主義的人格概念と比較しつつ、ウィリアムズの議論を批判的に検討する。

キーワード：ウィリアムズ、パーフィット、不死、人格の同一性

### 1. はじめに

本稿は、バーナード・ウィリアムズの論文「マクロプロス事件：不死の退屈さについての考察」(Williams 1973)で論じられている不死の問題を再考する。この論文はカレル・チャペック原作、レオシュ・ヤナーチェクのアダルト・オペラ『マクロプロス事件』を題材にしており、300年の生命を手に入れた女性が主人公である<sup>1)</sup>。ウィリアムズは「不死であることは必然的に退屈を生じさせるため、誰にとっても望ましいものではない」と主張するが、本稿ではこの主張を批判的に検討する。さらに、ウィリアムズの主張の根底にある人格概念をデレク・パーフィットの還元主義的人格概念と比較し、どちらの人格概念の方が、現実のわたしたちにとって適切で

1) *Věc Makropulos* (1926)。このオペラはカレル・チャペックの戯曲(1922年)を原作としている。この戯曲は、同じ年に発表された『メトセラへ帰れ*Back to Methusalem*』に対する返答として書かれた、とよく言われるようだが、チャペック本人は「序言」で以下のように述べている。

今年の冬、目下のところは抜粋によってしか知らないが、同じく長寿の問題が——どうやら、かなり壮大な規模で——扱われているバーナード・ショウの新作『メトセラへ帰れ』が出版されたから、ショウと私との二つの作品の間に関係に前もって触れておいたほうがよいであろう。

この素材的な一致はまったく偶然であり、抜粋によって推測できるように、その一致は表面的にすぎない。なぜなら、バーナード・ショウはこの問題に关して、私とはまったく反対の結論に到達しているからである。私の判断によれば、ショウ氏は数百年生きる可能性の中に未来の楽園、ないしは人類の理想的状態を見ているようだ。

私の作品では、長寿の問題は、まったく別の様相において描かれている。つまり、度を越えた長生きは理想的な状態どころか、まったく望ましくもなんともないものとして描かれているということが、読者のみなさんにもおわかりのことと思う。……〔以下略〕(チャペック 1922年、157頁)

あるかを検討する。

### 1-1 ウィリアムズの議論

『マクソロス事件』のヒロイン、エミリア・マルティは、皇帝ルドルフ二世<sup>2)</sup>の要請に応じて侍医であった父が作り出した不老不死の「秘薬」を、皇帝に献上する前に毒味役として飲み、それ以来、42歳<sup>3)</sup>の外見のまま年をとらず300年の歳月を生きることとなった。彼女は幾人もの男性と結婚して子供を産み、夫が老いて死ぬ頃になると自分の死亡届を出して別の場所へ移り住む。300年の間にエミリアはヨーロッパ各地に20人近くの子供とその子孫たちを残し、次々と名前を変え<sup>4)</sup>、いつから歌手であったのか明らかではないが、長年歌い続けたおかげで歌唱の技巧は磨き上げられ、今や「世界最高の歌手」とさえ称されるようになる。

だが、エミリアは生きることがもう耐えられないと訴え、次の300年を生き続けることを拒んで物語の最後で死を選ぶ。なぜ彼女は拒むのか。それは不老不死の生に耐えられないからである。

ヴィーテク〔司法書士〕（興奮して）でも、すみませんが、たしかに……高い価値……理想……使命というものがありますが……

エミリア あるわね、でもあなた方だけのものよ。どういうふうにあなた方に言えばいいのかしら？ たぶん、それは愛なのね、でも、あなた方のなかにだけあるものよ。あなた方の中になくしたら、どこにもないし、愛なんて全く存在しないわ……宇宙の中のどこを探してもね。人間は300年も愛することはできないわ。300年なんて望むことも、作ることも、見つめることもできやしない。それを持続できない。幸せに生きるなんて退屈だし、ひどい生活を生きることも退屈よ。天上も地上も退屈。やがて、それは本当は実在しないのだということがわかる。何もない。罪さえもない。痛みさえも、地球さえも、すべてが無……〔以下略〕（チャベック 1922年、226頁。引用は邦訳ページ。）

ウィリアムズによれば、エミリアの置かれた状況が示唆するのは、死は必ずしも悪（an evil）ではない——もちろん死は最期に大きな苦しみを与えるが、あまりに長く生きることをよいことだとは見なせないだろう——ということ、さらに彼女が訴える耐えがたい退屈は、彼女個人の偶然的な経験ではなく、他の人々もまた同じように不老不死（immortal）の生を経験しえた

2) ハプスブルグ家の神聖ローマ皇帝。在位1676年—1612年。ボヘミア王。

3) 彼女は16歳の時に父の「秘薬」を飲み、一週間ほど高熱を出して意識を失っていた。その後の経緯は描かれていないが、生物学的年齢は37歳で止まっているという設定である。なお、チャベックの原作、ヤナーチェクのオペラのいずれもエミリアの年齢を37歳（もちろん正確には337歳）としているのに、ウィリアムズだけが42歳と書いている理由は定かではない。本稿注6も参照。

4) 1585年に生まれた時の名はエリナ・マクソロス。300年の生命を得てからはエリアン・マック・グレゴル、エウヘニア・モンテス、エカチェリナ・ミュシキン、エリザ・ミュラーなど、いずれもイニシャルがEMとなる名を名乗る。

なら例外なく経験するであろう必然的なものだ、ということである (Williams 1973, p. 83)。

## 1-2 なぜ300年の人生は耐えられないほど退屈なのか

### (1) 死の悪さに関するウィリアムズの主張

古来より「死は悪ではない」と主張した哲学者たち<sup>5)</sup>はいたものの、通常、ほとんどの人々は死を人生における最大の悪だと見なしている。現代の代表的な哲学者はネーゲル (Nagel 1970) であり、彼によれば、死は当人から人生における善を奪うがゆえに悪である。

しかし、と、ここでウィリアムズは問う (Williams 1973, p. 89)。ネーゲルが論じるように、死は災厄 (misfortune) であり、長い人生のほうが短い人生よりも、より多くの善を享受するがゆえに、よりよいとしてみよう。そして、死は常に悪であり、死ぬことより生きていることのほうが常によりよいと考えてみよう。しかし、老化のスピードに多少の個人差があるとはいえ、いくら抗ったとしても人は皆、いずれは老いていき、心身の機能は衰えて不自由になり自分の思い通りに動かなくなってくる。こんな状態でただ長生きすることは望ましいものではない、むしろ死は生物としての人間に課された自然の定めとして受け入れるべきものであり、必ずしも悪いものではない、と言う人もいるだろう。

それならば、もしも年を取らなくなり、エミリアのようにある程度の若さを保ったまま永遠に生きられるとしたらどうだろう。そのような仮定の上で考えたなら、先に述べたような老化による苦しみは経験せずに済む。すると、生きていることは常によりよいことである——すなわち決して死なないことがよいという結論に到達しはしないだろうか。それは不老不死 (immortal) であることを望むということへとつながりかねない。かくして、死の悪さの議論は、不死を望ましいとする議論へと道を開きうるというわけである。

### (2) ウィリアムズの人格概念

現にそういった身の上なのに、342歳のエミリアはなぜ退屈へ陥るのか。342年の人生の何が悪いのだろうか。ウィリアムズによれば、彼女の陥った状況は偶然的なものではない。すなわち、人間にとって永遠に生き続けることは無意味であり、わたしたちは永遠に生きる理由をもちえないのである。なぜなら、不死の人生は必然的に退屈さ (boredom) と精神の死 (inner death) (Williams 1973, p. 90) へと至るからである。

エミリア あたし、こんなに、こんなに長いこと生きちゃいけなかったんだわ。

ヴィーテク なぜです？

エミリア 長生きなんて、人間には、とても耐えられるもんじゃないわ。100年、130年まで

5) 代表的な哲学者として挙げられるのは、エピクロス (『メノイケウス宛の手紙』『エピクロス——教説と手紙』, pp. 65-74) と、エピクロスの影響を強く受けたルクレティウス (『事物の本性について』) である。

なら、なんとか耐えられる。でも、やがて……やがて、それがわかってくる……。それから、その生の中で魂が死ぬ。

ヴィーテク 何がわかるんです？

エミリア おお、それを言い表す言葉はないわ。そのうち人間はもはや、何にも信じられなくなるのよ。なんにもよ。そして、それがこの倦怠感になるの。わかる、ベルティーク、あんたは言ったわね、あたしはうたっていると同時に凍えているって。いい、芸術はね、人間がそれを完璧にできないかぎりにおいて意味をもつよ。それができるようになったら、とたんに、それが余計なものに思えてくるの。どっちにしろ、それはむなしいことや、クリスティナ、軒をかくのと同じくらい空しい。うたうことは、それ自体、黙っているのと同じよ。すべてのものは同じ。それらの間には、なんの違いもない。(チャベック 1992年、225頁。)

身体的には42歳<sup>6)</sup>であるエミリアは、すでに特定の固定された性格 (a certain (fixed) character) をもった特定の種類の人格である。

ウィリアムズの人格概念では、このような特定の性格をもつ人々は、さまざまな欲求や価値観、計画を持つと共に、それらの基盤となる人生の基本計画 (ground projects) をもつ。この基本計画はその人だけのものであり、各人を未来へ向かわせる推進力となり、人に生きる意味を与えるものである (Williams 1976a, p. 13)<sup>7)</sup>。個別の欲求や計画は満たされてしまえばそれで失われる。またその実現が頓挫すれば失意のうちに忘れ去られたり、または意図的に忘れようとしたりするものもあるだろう。いずれにしても、それらは時の流れのうちに移り変わっていくものである。しかし、上層を流れ変化していくそれらの欲求や計画の根底にある基本計画や、基本計画を生む元となる個人の性格は、いったん定まってしまったなら、それほど簡単には変化しない。ウィリアムズの人格概念では、人は生涯を通じて統一性をもつ同一の人間として存在するものだからである。

このような人格概念を前提すると、エミリアの人生の経験は同じパターンの反復でしかなく、まさに彼女が語る倦怠感と退屈さを感じるようになるだろうと思われる。もちろん、300年も生きているのだから、その間に文化や風俗、生活様式は大きく変化し、歴史的な事件や強い個性をもつ人々に遭遇することも数多くあっただろう (たとえば彼女はフランス革命を目撃し、主要な人物の言動を現在でも記憶していると語っている)。しかしそれを経験する受け手の性

6) ちなみに42歳という身体的な年齢に関しては「この選択は (もしそれが選択したのであるなら)、個人的には、現時点では歓迎したい——特定の年齢で永遠に過ごすのなら、素晴らしい年齢であるように思う。女性にとって必ずしもそれほど悪い年齢というわけではないだろう (Williams 1973, p. 90)」と述べているが、個人的にはこの点にはいささか疑問がある。ただし、年齢が高くなるほうが性格が固定され変化しにくくなるので、ウィリアムズの説明にとっては、若すぎるよりも、ある程度、成熟した年齢のほうが望ましいとは言えるだろう。

7) そしてまた、このような人々は自分自身の統一性 (integrity) をもつ。統一性については、Williams 1976bで述べられている。

格は既に固定されている。ゆえに、その新しい経験を真に受容し楽しむことはもはやできず、世界からも人々からも孤立し、消極的で冷淡になる。特に長く生きれば生きるほど、時代の変化もかつて経験したことの繰り返しとして感じられるのだから、もうすでに飽き飽きし、強い刺激にさえ無反応になっていくだろう。やがて彼女は常に「まるで凍えているみたいに冷々と (チャペック 1922, p. 184, 台詞は一部改変)」と形容されるような態度をとるようになったのである (Williams 1973, p. 90)。

## 2. ウィリアムズの議論に対するいくつかの批判

ウィリアムズの議論に対して、不死はそれほど悪くはないという批判を簡単に紹介しておこう。

ジョン・マーティン・フィッシャーは人々のもつ快や欲求を分析する (Fischer 1994)。欲求の中には一度満たされてしまえばそれで失われてしまうものもある。たとえば、ある人が恐怖感を克服するために登山に挑戦して登頂に成功し、達成感を味わったとしよう。彼はその時「高所恐怖症や登山の苦しみを克服したい」という欲求を満たし、また山頂からの眺めに爽快感を味わったのだが、その後もう二度と登山したいとは思わない。この種の快は、自己消費された (self-exhausting) 快である。

だが、快の中には反復可能な快 (repeatable pleasures) もある (Fischer 1994, Fischer 2009, p. 85)。具体的に挙げられているものとしては、性的な快、美食の快、美しい音楽を聴く快や偉大な芸術作品を鑑賞する快などである。

確かに、これらの快は数回で飽きてしまうというものではないし、一度は飽きて退屈したように思えても、時間をおいたり、また自分が年をとってからその作品を聴き直したり見直したりしてみると異なった印象をもち、違った面白さを再発見したりするものである。さらに、達成することに時間のかかる欲求もあるだろう。たとえば貧しいわたしがフェルメールの絵画のすべてを観に行こうと決心し、マウリッツォホイスを筆頭に世界各国の美術館を訪れようとしたならば、達成するまでに数十年の長い歳月を要するかもしれない。

また、ウィズニュースキーは、次のような反例を挙げる (Wisnewski 2005, pp. 34-35)。わたしが古代ギリシャに生まれ、「可能な限りの身体的な快を経験したい」という欲求をもちながら数千年を過ごしていると仮定しよう。この欲求がわたしに生きる理由を与えてきた。だが、技術的な問題のせいで、この欲求は十分にはかなえられることなく、わたしは数千年もの間、退屈な人生を過ごしてきた。しかしながら20世紀後半になって突如、テクノロジーが急激に進歩し、映像やコンピュータ、通信技術の発展によって新たな可能性がわたしに開かれた。わたしは今や、自宅に居ながらにして音楽や映画や多様な芸術作品の快を享受し放題となり、長年満たされることのなかった快が一気に満たされることになった。このとき、わたしはもはや退屈ではない。むしろ、ようやく意味ある人生を送り始めたのである。

このように、わたしの快や欲求が変化しなくても、社会や環境の変化によって退屈さを感じるかどうかは変化しうる場合がある。ゆえに、不死と退屈さの関係は必然的なものではない。

わたしもまた、彼女の300年の人生が必然的に退屈に陥るとは思わない。先に引用したエミリアの台詞の中で、彼女はこう言っている。

芸術はね、人間がそれを完璧にできないかぎりにおいて意味をもつものよ。それができるようになったら、とたんに、それが余計なものに思えてくるの。どっちにしろ、それはむなしいことよ、クリスティナ、麩をかくのと同じくらい空しい。

しかし、本当に、300年歌い続けることができたならば、彼女の歌唱は完璧なものとなり、本人にとって歌を歌うことは「麩をかくのと同じ」ものとなるのだろうか。そうではないだろう。なぜなら、歌唱や楽器演奏を習得することは、本質的に長時間の反復練習を伴うという性質を持つからである。そして、無限に近く反復したからといって完璧なものとなるわけでもない。どの歌手や奏者もひとつのフレーズ、ひとつの曲を飽きることなく繰り返し練習し続けるが、どれがベストであるのか他者の評価はまちまちであり、自分自身でも時間が経つにつれ評価が変化し続けるものだろう。だから音楽家は同じ曲の録音を何度も繰り返すのである。たとえばグレン・グールドは、50年という短い生涯のうちに二度、全く異なるスタイルの『ゴルトベルク変奏曲』をリリースしている。ではグールドがエミリアと同じような条件で300年生きられたなら、バッハを弾くことに飽きたらどうか。いや、逆に12種類の『ゴルトベルク』がリリースされているかもしれない。そして、聴き手の側もまた、どの盤がベストであるかと議論が尽きることはなく、飽きることもないだろう。

歌手や演奏家が引退する原因の多くは、歌うことや演奏することそれ自体に飽きたからではなく、加齢による衰えを自覚したことがおそらく最も多く、他には自分の音楽家としての才能の限界に絶望したとか、才能の枯渇を感じたとか、身体が故障して再起できないといったことにあるのではないだろうか。しかしエミリアの身体は42歳のまま老いることも死ぬこともない。彼女は声も体も衰えない。一時的に体調を崩したとしてもやがて治るだろう。特定の時代にだけ活動するのであるなら、その時代の人びとが好む曲ばかり歌うことを強いられ、それに飽きっていくこともあるかもしれないが、流行や聴き手の需要も時代に応じて変化する。そして彼女は300年生きているのだから、バッハ以前の音楽から新ウィーン派まで大きく変化した西洋音楽の中のどれについても知悉しているはずである。性格や好みによる偏り、向き不向きなどはあるかもしれないが、音楽の多様性という点からみれば、彼女は自由に選択することができる。そんな中で、「歌うことそれ自体に退屈する」などという事態があり得るだろうか。エミリアが「歌うことが麩をかくことと同じくらい退屈」と言うとしたら、それは彼女が300年生きて完璧に歌えるようになったからではないはずだ。わたしたち人間には「完璧」に何かをなすことなどあり得ない。もしそんなことが言えるのなら、彼女は真に音楽という芸術を理解

していないと思われる。

そして音楽だけでなく、人間の活動というもののほぼすべてに本質的に同じ性質が含まれているのではないだろうか。本を読むこと、スポーツ選手として活動すること、山に登ること、刺繍や編み物をする事、家を建てること、そして哲学の論文を書くこと、そのどれも、同じ仕事を長く続けているからといって、その活動自体が退屈に感じられるというものではない<sup>8)</sup>。単調に思われるかもしれない仕事であったとしても、それぞれに一回きりの経験をし、おそらくそこでは想定外の事態が発生し、それに対応することを求められる。たとえば、ある店舗の同じ売り場に勤務している接客業であったとしても、大勢の客はそれぞれ別々の性格をもっている。人の性格をある程度の類型に分けることはよくあるが、しかし「類似した性格」だからといって「完全に同じ性格」ではない。よく似た性格傾向を持っておいても別人である顧客に対する微妙な対応の違いは決して「完璧で退屈」なものとはならないだろう。この点で、原作者のチャペックやウィリアムズの前提は、人間の活動について根本的な誤解を含んでいるように思われる。

### 3. パーフィットの人格概念

上記のようにウィリアムズの議論にはいくつかの反論が想定できる。しかし、これらの反論は、「年をとらずに生き続けることは悪くない」という主張になりうるかもしれないが、不死であることを必要条件としていない。たとえばウィズネスキーは古代ギリシャを仮想例としているが、そこまで極端な事例でなく7～80年という標準的な寿命の人間を想定してみてもこの議論は十分に成立する。

そこで本稿では、視点を変えて、ウィリアムズの議論の根幹をなす人格概念に疑問を呈したい。なぜなら、不死の生が必然的に退屈だという結論に至る最大の原因は、彼のこの人格概念にあるからであり、しかしながらこのような人格概念は、現実のわたしたちのあり方を適切に反映していないように思われるからである。

むしろ、ウィリアムズが何度も批判的に論じている (Williams 1973, Williams 1976a) パーフィットの人格の還元主義 (reductionism) のほうが、わたしたちにとって魅力的でありかつ現実とも調和しており、さらにエミリア・マルティのような不死の事例にもうまく対応できるように思われる。

#### 3-1 人格の還元主義

まず、パーフィットは、人格 (person) という概念は重要ではないと考えている。言い換えれば、「人格」という言葉をわざわざ用いなくても、そこに含まれている事実はすべて自然的

---

8) たとえばモンテニユは死の直前まで『エッセー』に加筆を続けた。

性質によって記述可能であり、そこから漏れてしまう記述不可能なもの——たとえば「魂」や非物質的な実体など——は何も存在しないと考えている（逆に言えば、そのような記述不可能で、何らかの事実に還元できないものが人格にはあると考えるのが非還元主義である）。還元主義にはさまざまなバージョンが存在しうるが、以下のような主張をする。

(3) ある人の存在は、ひとつの脳と身体が存在、そして相互に関係する一連の物理的・心理的な出来事の生起にのみ存する（Parfit 1984, p. 211）。

(9) 人格は存在するが、われわれは「人格が存在する」と主張しなくても現実について完全な記述を与えることができる（Parfit 1984, p. 212. 傍線部は原文ではイタリック体）。

つまり、「わたし」という人格は意図、欲求、計画、記憶などの心理的特徴と身体とで成り立っており、それ以上のものは何も含まれていない。

また、人格の同一性（personal identity）という概念それ自体もパーフィットにとっては重要ではない（事例「わたしの分割」Parfit 1984, pp. 254–255 参照）。パーフィットにとって重要なのは、現在のわたしと将来の誰かとの間に「同一性」という一対一対応の関係が成立しているということよりも、「現在のわたしと関係 R（心理的連続性と／あるいは心理的継続性 psychological connectedness and /or psychological continuity<sup>9)</sup>）をもった誰かが、将来生きている」ということである（Parfit 1984, p. 262）。

パーフィットが支持する還元主義においてもっとも大事なことは、ウィリアムズが考えるように、人生の基本計画を維持し続け統一性をもったひとりの人物として生き続けることではない。そうではなく、今のわたしが大事だと思っている心理的特徴を持ち続けることや、特定の経験それ自体を保ち続けることなのである。たとえば、わたしがヴェネチアを愛し、この街を水没から守りたいと強く願い、そのために活動を続けているとしたならば、その経験それ自体が今のわたしにとって重要なこととなるのである。

しかし、わたしのその欲求は時の経過とともに変化するかもしれない。数十年が経った後、わたしはヴェネチアに関心をもたなくなり、熱帯雨林の保護へと関心に変化するかもしれない。そのとき、過去のわたしと現在のわたしの関係 R は大きく減少しているだろう。また同時に、現在のわたしは過去のわたしへの関心を失い、同じ「わたし (I)」だとは見なさなくなる。だがパーフィットの還元主義では特に問題は起こらない。そのときには「わたし」から、もはや関心をもてない単なる「過去の自分 ('my past self) 」へと呼び名が変わることになるからである（Parfit 1984, pp. 304–305, pp. 326–329, pp. 303–304）。このとき、恣意的に「わた

9) ウィリアムズの議論があまりにも直観に依存しすぎているのではないか、死すべき存在であるわたしたちに「不死であること」を正確に思い描くことなどそもそも可能なのか、といった種類の批判もある。Burley 2009を参照。



し」と呼んだり「過去の自分」と呼んだりしているわけではないことに注意して欲しい。この呼び方の変化は「今のわたしと同じだけの関係Rがある」あるいは「もはや『わたし』と呼べるだけの関係Rは保たれていない」といった事実を単に述べているに過ぎないのである<sup>10)</sup>。ウィリアムズは、男性から女性、そしてまた男性へと変化を遂げたテーバイの予言テイレシアスについて、「テイレシアスは性格をもちえない。……彼はひとりの人格ではなくひとつの現象である (Williams 1973, p. 94)」と述べているが、還元主義ではこのようなことを言う必要はない。たとえある日突然、性が変わろうとも、わたしの性格特徴や欲求、意図に以前との連続性があるなら、テイレシアスはひとりの人格であると言うことができる。もちろん、性が変わったことで心理的特徴に劇的な変化が起きたなら、そのときは「わたし」ではなく「過去の自分」と見なすことになる。

### 3-2 人格の還元主義と不老不死

それでは、パーフィットの還元主義的人格概念を前提すると、仮にわたしたちが不老不死でありえたなら、退屈の問題をどう扱うことになるだろう。もちろん個人差が大きいので一概には答えられないが、少なくともウィリアムズが考えたように必然的に退屈に陥らざるを得ないという答えは容易には出てこないように思われる。パーフィットの想定するR関係は、いわばヒュームの「知覚の束」であり、その内容は絶えず入れ替わる。もちろん、実現を強く望み続けている欲求や幼い頃から抱いている理想などはずっと残り続けるだろう。しかし、緩やかであれ急速であれ、入れ替わり続けていることに変わりない。もちろん、ウィリアムズが言うように、ある程度の年齢になれば人の性格は柔軟性を失っていくだろうが、特定の性格に必ず固定されなければならないわけではない。

そうすると、たとえばエミリアと同じように300年間を生きてきた人に、過去の自分と関心や欲求や価値観の根本的な変化が起こることも当然考えられる。彼女がその後に名前と居住地を変え、別の人間として新たな職業に就き、新たな人間関係を築いて快適に生き続けるとしても、パーフィットの人格概念ではごく普通のこととして説明できる。そこではウィリアムズがあるべきだとした一人の人としての統一性や人格の同一性は保たれていないかもしれないが、もともとそのようなものはパーフィットにとって重要ではないのである。彼女には固定された性格をもち続ける必要はなく、時代の変化を取り入れ、新しい文化の到来を楽しみながら、違う人間として生き、不死の生を飽きることなく楽しむことができるかもしれない<sup>11)</sup>。

10) 心理的連続性は特定の記憶や欲求などが過去のある時点から未来のある時点まで直接持続されているかどうかという関係なので、有るかないかの二者択一である。心理的連続性は、複数の心理的連続性の連鎖が重なりながら全体として切れ目なくつながっているかどうかという関係なので、多いか少ないかという程度問題となる。

11) さらにまた、しばしば誤解されているが、「わたし」が簡単に「過去の自分」へと変化するわけではないし、パーフィット自身はその変化を望ましいものと主張しているわけでもない。「…わたしは自分の人生がある種の全体的な統一性 (overall unity) をもつことを望む。自分の人生が、欲求や関心が絶え間なく変動する、非常に不規則なものであってほしくはない。(Parfit 1984, p. 301)」

#### 4. むすび——人格の還元主義と死の問題

不老不死の人生といった極端な事例はいったん脇に置き、パーフィットの人格の還元主義は、不老不死ではないわたしたちの死の問題に対して、何を言うことができるだろうか。以下の一節は『理由と人格』の中で非常によく知られている文章である (Parfit 1984, p. 281)。

わたしが非還元主義的見解を信じていたとき、自分の避けがたい死についてもっと気にしていた。わたしが死んだ後、わたしである人間は誰もいない。今、この事実を以下のように記述し直すことができる。死後に多くの経験が存在するけれど、それらの経験の中に、経験記憶や、それ以前の意図の実行と直結する連鎖によって、現在のわたしの経験とつながっているものは何もない。これらの未来の経験のいくつかは、わたしの現在の経験と、もっと間接的な仕方に関係しているかもしれない。いくつかは、後にわたしの生についての記憶になるかもしれない。そして、後にわたしに影響された考えになるかもしれないし、わたしの助言の結果として行われることもあるかもしれない。わたしの死は、現在と将来のわたしの経験というより直接的な関係を切断するが、その他のさまざまな関係を切断するわけではない。これが「わたしである人が誰も生きていないだろう」という事実のすべてである。このように考えるようになった今では、わたしの死はそんなに悪いものではないように思われる (my death seems to me less bad) (Parfit 1984, p. 281)。

自分自身についての信念を非還元主義から還元主義へと改めることによって、自分自身と他人との境界線が以前より緩やかなものとなり、それによってわたしの死は完全な無ではなくなるように思われるようになるだろう。「これがそんなに重大事になりうるだろうか？」とパーフィットは言う (Parfit 1984, p. 282)。

とはいえ、それは「死の恐怖が以前よりも和らぐ」という程度の問題であり、分裂もしないレプリカもいない通常のわたしたちにとって、わたしの死は端的にわたしの消滅である。確かに自分の子供や、自分の書き残した物や作り出した物が死後にこの世に残ると考えることによって、何らかの精神的な慰めをえる人もいるかもしれない。だが、何も残すものがない人間にとっては、死は自分のいっさいの経験の消滅であることに変わりない。その点では、還元主義を受け入れたとしても、依然として、死は善の剥奪であり悪であるという主張に説得力があると見なすのが適切であるように思われる。

## 文 献

- エピクロス 『エピクロス——教説と手紙』、出隆・岩崎允胤（訳）、岩波文庫、1959年。
- Burley, Mikel (2009), "Immortality and Meaning : Reflections on the Makropulos Debate", *Philosophy* 84, pp. 529–547.
- Čapek, Karel (1922), *Věc Makropulos* (カレル・チャペック「マクロプロス事件——序言と三幕からなるコメディー」、カレル・チャペック、ヨゼフ・チャペック、田才益夫（訳）『チャペック戯曲全集』、八月舎、2006年、155–229頁。)
- Fischer, John Martin (1994), "Why Immortality Is Not So Bad", *International Journal of Philosophical Studies* 2, pp. 254–270. Reprinted in Fiser, John Martin, *Our Stories——Essays on Life, Death and Free Will*, Oxford University Press, 2009, pp. 27–35.
- Janáček, Leoš (1926), *Věc Makropulos* (レオシュ・ヤナーチェク、歌劇『マクロプロス事件』、サー・チャールズ・マッケラス（指揮）、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、1978年、UCCD-3960/1, DECCA)
- ルクレティウス 『事物の本性について』、藤沢令夫（訳）、『古典世界文学20 ウェルギリウス／ルクレティウス』、筑摩書房、1976年、290–432頁。
- Nagel, Thomas (1970), "Death", *Nous* IV, no. 1, pp. 73–80. Reprinted with various revisions in *Mortal Questions*, Cambridge University Press, 1979, pp. 1–10. (トマス・ネーゲル「死」、『コウモリであるとはどのようなことか』、永井均（訳）、勁草書房、1989年、1–16頁。)
- Parfit, Derek (1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press. (デレク・パーフィット『理由と人格』、森村進（訳）、勁草書房、1999年。)
- Williams, Bernard (1973), "The Makropulos Case: Reflections on the Tedium of Immortality", in *Problems of the Self Philosophical Papers 1956–1972*, Cambridge University Press, 1973, pp. 82–100.
- (1976a), "Person, Character and Morality", originally published in *The Identities of Persons*, Rorty, A. O. (ed.), University of California Press. Reprinted in Williams 1981, pp. 1–19.
- (1976b), "Utilitarianism and Self-indulgence", originally published in *Contemporary British Philosophy, Personal Statement*, Lewis, H. D. (ed.), Allen and Unwin. Reprinted in Williams 1981, pp. 40–53.
- (1981), *Moral Luck Philosophical Papers 1973–1980*, Cambridge University Press.
- Wisniewski, J. Jeremy (2005), "Is the Immortal Life Worth Living?", *International Journal for Philosophy of Religion* 58, pp. 27–36.